

最近の合計特殊出生率は1.29にまで落ち込み、少子化対策は待ったなしの状況にあるが、この事態は母親から子育ての経験がどんどん奪われていることを示しており、そのぶん、小児科医が子育て支援に大きくかかわる状況を生んでいる。したがって小児科医の“質の向上”が期待される世の中となり、小児医療は学問的にも実践的にも身近な症候から病態、診断を探し当てていく姿勢と、一方で高次先端医療に必要とされる知識、医療技術を身に付けていく姿勢との両方が求められるようになった。

学生や研修医が、小児科学の膨大な知識をすべて吸収することは不可能である。教育の場で成し得ることは、診察技術を徹底して身に付けさせ判断の足場を確立させること、病態の説明を論理的に行いその論理に普遍性をもたせること、細かな知識ではなく曖昧な所見や情報からおおづかみに疾患の流れる方向を把握でき、その流れから疾患の細部へ攻め込む能力を磨いていく姿勢を培うこと、などかと考えている。

知識は力である。しかし知識として大切なことは、疾患の全体を見渡せる洞察力に直接かかわる知識であることであり、末梢的な知識は常に流れていくものであってそれはその場その場で、例えばインターネットで検索すれば済むことである。また多忙な小児科医にとって、基本的な知識の確認を常に実行していく姿勢が重要であり、臨床の現場で間違いない判断を下していくに際して、その確認をしよ

うとする努力は大切である。そして、その確認に耐え得る辞書の書物はおおいに助けになるはずである。

本書はすでに第4版を上梓し、これまでこのような基礎的かつ実践的知識の辞書的役割を果たしてきた唯一の書物である。本書は初版より大きく2部の構成で、「症候編」と「検査編」とから成り立っており、その内容はさらに充実したものとなっている。さらに今回は、付録として小児疾患に用いられる種々の「診断基準」が加えられていることに特徴がある。現在、諸専門分野で用いられている「診断基準」が一挙に掲載されていることにより、本書の辞書的役割が飛躍的に向上している。編者の方々の慧眼に敬意を表すべきであろう。

本書は小児科外来、あるいは病棟の手の届くところに置いて使うものであり、その方法で用いることにより真価を発揮するものである。また、必ずしも小児科外来だけでなく、救急医療の現場や、他科専門医が子どもの患者に接してあらためて手にする場面でもおおいに力を発揮するだろう。「症候編」は鑑別疾患を見逃さないために極めて有用であろうし、「検査編」は小児に特有の変化を確認するのに必須である。大幅に改善された第4版の本書を推す。

(B5判 716頁 定価16,275円(本体15,500円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)